

2026 年 6 月 21 日（日）主日朝礼拝説教

『宗教と道德の墮落』 井上隆晶牧師

エゼキエル 22 章 1～4、23～25 節、マルコによる福音書 13 章 32～37 節

①【エルサレムが滅んだ理由】

エゼキエルは祭司の子ですが、2500 年ほど前に、エルサレムで預言者として神から召命を受けます。彼はエルサレムがバビロン軍に包囲されたとき、ユダの人たちと共にバビロンに連れて行かれ、その地でユダの捕囚の民に向かって神の言葉を語りました。彼の預言は、黙示的なものが多いので解釈が難しいのですが、学ぶことが大いにある書だと思います。エルサレムの町はバビロンによって滅ぼされてしまいますが、その理由はユダの国が軍隊が弱かったせいでもなく、経済政策が失敗したせいでもなく、ユダの人たちが神に従わず、偶像崇拜を行ったから滅んだのだというのが聖書の一貫したメッセージなのです。そこで神がバビロンを用いてエルサレムを打ったのです。エルサレムの町を滅ぼしたのは、バビロンではなく神なのです。

●戦後、若者たちが奪い合うようにして読んだ本に「日本の傷を癒すもの」というのがありました。東京大学の総長をした矢内原忠雄先生が書いたものです。彼は無教会派に属するキリスト教徒でした。その本の中で彼は「日本はアメリカに負けたのではないのだ、日本は神によって滅んだのだ、その滅んだ日本をいやすものは神以外にはない。本当に神に帰る以外に日本の復興はないのだ」という意味のことを書いています。

でも今の日本では、そのような見方をする人はほとんどいないでしょうし、そんなことを言ったら人々から笑われるでしょう。そしてほとんどの人が神に従わず偶像に帰って行っています。

②【社会的な罪と宗教的な罪】

エゼキエル 22 章 4 節に「流した血によってお前は罪を負い、造った偶像によって汚される。」と書かれています。更に 7 節から 12 節まで、エルサレムの町の人々の墮落した姿が詳しく書かれています。「父と母はお前の中で軽んじられ、お前の中に住む外国人は虐げられ、孤児や寡婦はお前の中で苦しめられている。…ある者は隣人の妻と忌まわしいことを行い、ある者は、恥ずべきことを行って嫁を犯し、またある者は異母姉妹を凌辱する。お前の中には賄賂を取って流血の罪を犯す者、利息を天引きして金を貸したり、高利を取って隣人を抑圧する者がいる。お前はわたしを忘れた、と主なる神は言われる。」これらを読むとユダヤ人は何と社会的倫理の低い民族かと思うかもしれませんが、今の日本の国も同じではないかと思います。これは警告として言われているのであり、ユダヤ人は一つのモデ

ルとして語られているのです。

●榎本保郎牧師はこの箇所についてこう語ります。「神の審判の原因の一つは、社会的倫理の墮落である。その原因は宗教的倫理の墮落であり、神を恐れることがなくなっているところに原因があると言える。…今日、いろいろと社会的問題が言われているが、それは信仰、宗教の力が非常に弱いことに原因があると思う。宗教は…社会生活を清めてゆく原動力である。」

聖書はその初めからはっきりと、人が神に従わなかったので、神との関係が破壊され、その結果として隣人との関係も破壊されたのだと語っています。それはちょうど傘の中心から放射状に骨が伸びていて、中心から離れれば離れるほど、横の骨との距離も離れてゆくようなものです。神との関係が破壊されると、人との関係も破壊されるのです。宗教的な罪がまず先にあり、その結果として社会的な罪も起こってくるのです。これが聖書の共通したメッセージです。十戒もそのように構成されています。第一戒から第四戒までが神と人との関係に対する戒め、第五戒から第十戒までが人と人との関係に関する戒めです。そして第一の戒めを破ると、それ以下のすべての戒めを破るようになるのです。第一の戒めとは「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」（申命記 5：7）です。これを破るとは自分自身が神になることです。自分が神になると、真の神を自分の願いを聞かせる奴隷にし、安息日を守らず、両親を敬わず、気に入らない人を殺し、姦淫し、他人のものを盗み、欲しがり、嘘をつくようになります。神を本当に神とし、神に仕えるということは私たち人間の本文であり、一生の仕事であり、なかなか出来ないことなのです。

③【神を畏れることの大切さ】

26 節に「祭司たちはわたしの律法を犯し、わたしの聖なるものを汚した。彼らは聖と俗とを区別せず、浄と汚れの区別を教えず、わたしの安息日に目を覆った。」

（エゼキエル 22：26）とあります。祭司の罪は、聖と俗とを区別せず、浄と汚れの区別を教えないことにあります。

詩篇の中で一番出てくる言葉は「神を恐れ（畏れ）よ」です。「主を畏れることは知恵の初め。」（箴言 1：7）とも書かれています。旧約聖書では、「人は私を見て、なお生きていることはできない」（出エジプト 33：20）と言われ、シナイ山で神が民に語ったとき、民は「これ以上、…主の御声を聞くならば、死んでしまいます。」（申命記 5：25）と言いました。契約の箱は祭司しか担げず、環に通した竿によって担がれましたが、契約の箱に触れたウザは打たれて死にました。それは聖なる神に人は触れることができないことを教えるためでした。

神殿の構造はそのまま、神の聖性を現していました。神殿は至聖所、聖所、祭司の庭、イスラエルの庭、婦人の庭、外国人の庭という実に、六層の壁に隔たれていたのです。それは聖なる神に近づくためには相当な準備が必要なのであり、人

は軽々しく神に近づくことは出来ないことを教えているのです。祭司たちは祭服を着ないで神の前に立ってはなりませんでした。「それを身につけていれば…祭壇に近づいたとき、罪を負って死を招くことがない。」(出エジプト 28:43) 聖なる神の前に立つ時には慎みと、礼儀が必要であることを教えているのです。この祭服はキリストを象徴しているのです。キリストの衣を着ることなく、神の前に出る者は打たれるという事です。至聖所には年に一度だけ、犠牲の血を携えて大祭司だけが入れました。神の前には空し手ではならず、必ず供え物を持って来なければなりませんでした。キリストが十字架にかかり、唯一で最後の供え物になって下さいました。それで聖所と至聖所の間の垂れ幕は取り除かれ、至聖所に誰でも入れるようになったのです。だからといって至聖所がなくなったのではないのです。神の聖性は変わらないからです。キリストの犠牲なしに、つまり聖餐を携えずに神の前には立てないことを教えているのです。現代人は神を畏れなくなり、今のキリスト教徒も神を畏れなくなりました。教会内で牧師と信徒が、教会と保育園が裁判を起こしています。聖堂の中で怒りを発し、人を裁き、言葉で人を傷つけます。

●私の友人の K 牧師は日本基督教団の教師になる試験を受けた時に「教会は聖なる場所ではない」という論文を書いたのですが、その時の教師検定委員長から面接の時に「君の思想は危険だ！」と言われました。教会は聖なる場所ではない。聖と俗の区別をつけてはいけない、というのです。そうでしょうか。それは教会の世俗化につながるでしょう。

どんどん教会から神秘的なものが失われてゆき、人間がすべてに、人間の理性と知性と働きがすべてになっています。聖書も人間が、教会が造ったものだとか某神学校では教えるので、聖書自体を信じなくなっています。聖書の上に物を置いたり、聖書に肘をついたりしていないでしょうか。

●榎本先生のキリスト教徒ではない友人が神学校のキャンプに参加したとき、その教授が聖書をお尻の下に敷いて、座ったというのです。それを見て、その友人は黙って帰ってしまいました。そりゃあそうでしょう。聖書がそんな程度のものなら、信じる意味がないでしょう。未信者でさえもつまづくのです。私の友人のクリスチャンは、子どものころに聖書を跨いだとき、それを見た父親が自分のベルトをさっと抜いて叩かれたそうです。昔のキリスト教徒は一本筋が通っていました。

ひと言で云うなら今の人には、神に対する恐れがなくなったのです。神について学問は盛んになりましたが、神を拝む事をしません。神に跪くこともしません。罪を告白するという事もしません。罪という言葉さえ言われなくなり「差別」と言われるようになりました。愚かなことです。罪はもっと根が深いものであり、神に対する姿勢が狂っていることです。神が分からず、自分の罪が分からず、神の愛も人の愛も分からないことです。イエス様は友達であるかのように、または自分の願いを聞いてくれて、恵みをくださる方だけであるようになっています。私

はそのような教会の在り方に対して「ノー」と言いたいのです。「神性」「神秘」「宗教性」を取り戻さなければなりません。宗教性の墮落が、社会の墮落になるのです。「**彼らは聖と俗とを区別せず、浄と汚れの区別を教えず、わたしの安息日に目を覆った。**」という言葉が怖れて聞きたいと思います。神を恐れているかと問われれば、私もなかなかできていません。神を本当に神とし、神を拝み、従う者になりたいと思います。